

建物からみた手取川扇状地の縄文後晩期社会

山 本 直 人

はじめに

手取川扇状地は石川県南部にひろがる半径12kmの扇状地で、その扇端部では縄文時代後期後半から本格的な定住集落が形成されるようになり、後晩期の大きな集落遺跡が多数存在している。遺跡群のなかで中心的な役割をはたした野々市市御経塚遺跡は国史跡になっており、出土遺物も2010年に国の重要文化財に指定されたばかりである。御経塚遺跡からわずか2kmの距離にある金沢市新保本町チカモリ遺跡も国史跡に指定されており、その他にも晩期前半中屋式の標式遺跡である金沢市中屋遺跡、晩期後半長竹式の標式遺跡である白山市長竹遺跡、有機質の遺物が多数出土した金沢市中屋サワ遺跡や金沢市米泉遺跡などが密集している。このように手取川扇状地は縄文時代後晩期の地域社会を研究するうえで絶好のフィールドとなっており、筆者はその実態と変遷の解明にとりくんでおり、本稿もそうした研究の一環である。

これらの集落遺跡の建物に目をむけると、晩期前半の御経塚式期まで竪穴建物¹⁾がみられるが、後期末の八日市新保式期以降は竪穴建物が極端に少なくなり、晩期前半の中屋式以降は竪穴建物が検出されなくなる。その一方で、八日市新保式から晩期後半の長竹式にいたるまで縄文土器をはじめとして石器・石製品といった遺物が多数出土するので、八日市新保式期から御経塚式期の間で掘立柱建物にかかわることが予測されていた。しかしながら、その検討をこころみた研究者はおらず、推測の域にとどまっていた。こうした研究状況のなか、吉田淳氏と布尾和史氏が精力的かつ詳細な分析をすすめ、八日市新保式に掘立柱建物が出現し、中屋式期には竪穴建物にとってかわって掘立柱建物が普及し、中屋式期から下野式期、長竹式期にかけては掘立柱建物ばかりになることを解明した（吉田ほか 2003、布尾 2003、吉田 2009）。この研究によって地域社会像の一部が具体的に復元されるので、筆者は両氏の研究を高く評価している。しかしながら、掘立柱建物の変遷やそれらの型的な位置づけは正確におさえられているものの、なぜ御経塚式期で竪穴建物が消滅し、中屋式期からは掘立柱建物が一般化していったのか、その背景については論究されていない。また、後晩期に掘立柱建物が普遍化している東北地方や新潟県（荒川 2009）では円形の掘立柱建物がみられないのに対し、それが北陸地方にだけ存在する理由や大型化する背景についても論じられていない²⁾。

このような先行研究の問題点をふまえ、本稿は以下の3点を考究することを目的としている。第一は晩期前半御経塚式期までで竪穴建物が消滅し、後続する中屋式期からは掘立柱建物ばかり

になる背景を考究することである。第二は円形建物・環状木柱列の出現する較正年代を提示し、それが出現する背景を考究することである。第三は晩期後半に円形建物・環状木柱列が巨大化していく背景を考究することである。最初に吉田氏と布尾氏の研究成果を紹介し、両氏の研究に立脚して論をすすめていく。なお、円形建物については環状木柱列とおなじ遺構でありながら研究者によってよび方がちがっているため、本稿では中黒でならべて列記している。

1. 縄文後晩期の土器型式編年と較正年代

吉田淳氏と布尾和史氏の研究成果にふれる前に、北陸における縄文時代後晩期の土器型式編年と各土器型式の較正年代を確認しておきたい。

後期中葉～晩期の土器型式編年に関して、吉田淳氏は文様を有する土器の型式について後期「中葉後半期は酒見式とし、後期後葉の前半は、井口1式（井口Ⅱ式前半）・井口2式（井口Ⅱ式後半）、後半は八日市新保式1式・八日市新保2式とした。晩期は御経塚1～3（B～BC1）・中屋1（BC2）・中屋2（C1前半）・中屋3（C1後半）・下野（C2）・長竹（A）とし、並行する大洞編年を（ ）と考え」ている（吉田 2009：6）。

また、筆者らは御経塚遺跡や中屋サワ遺跡、金沢市藤江C遺跡などの出土土器に付着した炭化物を試料にAMS炭素14年代測定を実施してきており、その結果から後晩期の土器型式編年における各土器型式の較正年代をおおまかなところ以下のように考えている（山本 2006・2010）。後期後半においては馬替式（c.1800～c.1700 cal BC）、酒見式（c.1700～c.1500 cal BC）、井口Ⅱ式前半（c.1500～c.1400 cal BC）、井口Ⅱ式後半（c.1450～c.1350 cal BC）、八日市新保式（c.1350～c.1300 cal BC）、晩期前半では御経塚式（c.1300～c.1100 cal BC）、中屋式（c.1100～c.900 cal BC）、晩期後半では下野式（c.900～c.800 cal BC）、長竹式（c.800～c.600 cal BC）である。なお、土器型式の較正年代の大半は型式間で重複がない形であるが、重複していることも予想され、今後の研究の進展をまって訂正していきたい。

2. 北陸における建物の変遷

布尾和史氏は、柱穴配置とその平面形を分類基準として9遺跡の建物跡の復元と類型化をおこなっている（布尾 2003）。まず、AからDの4類に大別し、A類は方形・長方形の柱穴配置をとるもの（図1）、B類は亀甲形の柱穴配置をとるもの（図2）、C類は円形の柱穴配置をとるもの（図3）、D類は柱穴が円周上で不定に配されるもの、としている。さらにA類（方形建物跡）を3類に細分し、A1類（1間×1間）、A2類（1間×2間）、A3類（入れ子状）としている。B類（亀甲形建物跡）はB1類（6本の柱穴）とB2類（6本以上の柱穴）に細分している。C類（円形建物跡）も3類に細分し、C1類（主柱6本）、C2類（主柱8本）、C3類（主柱10本）としている。具

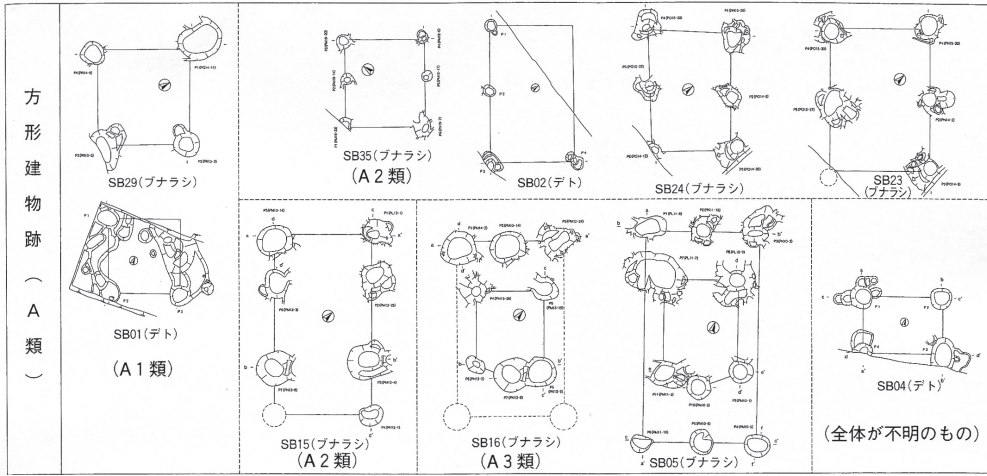


図1 御経塚遺跡の方形建物 (布尾 2003)

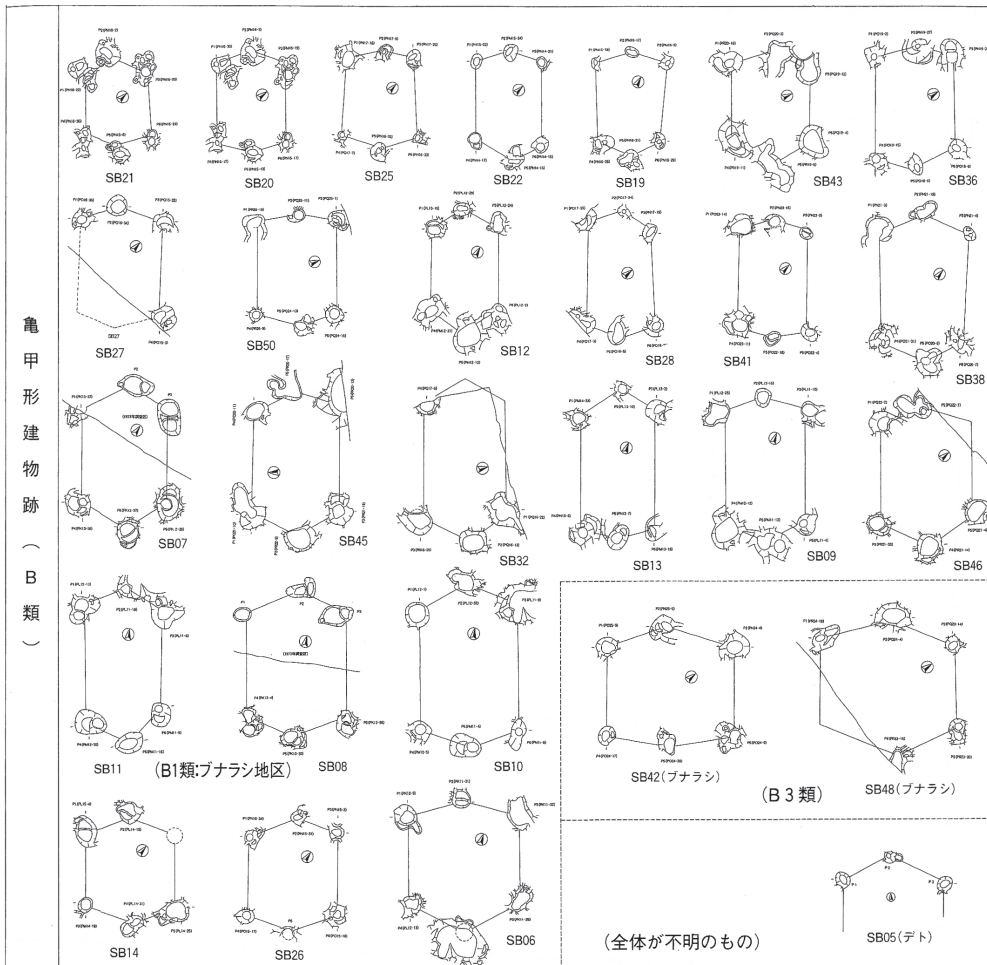


図2 御経塚遺跡の亀甲形建物 (布尾 2003)

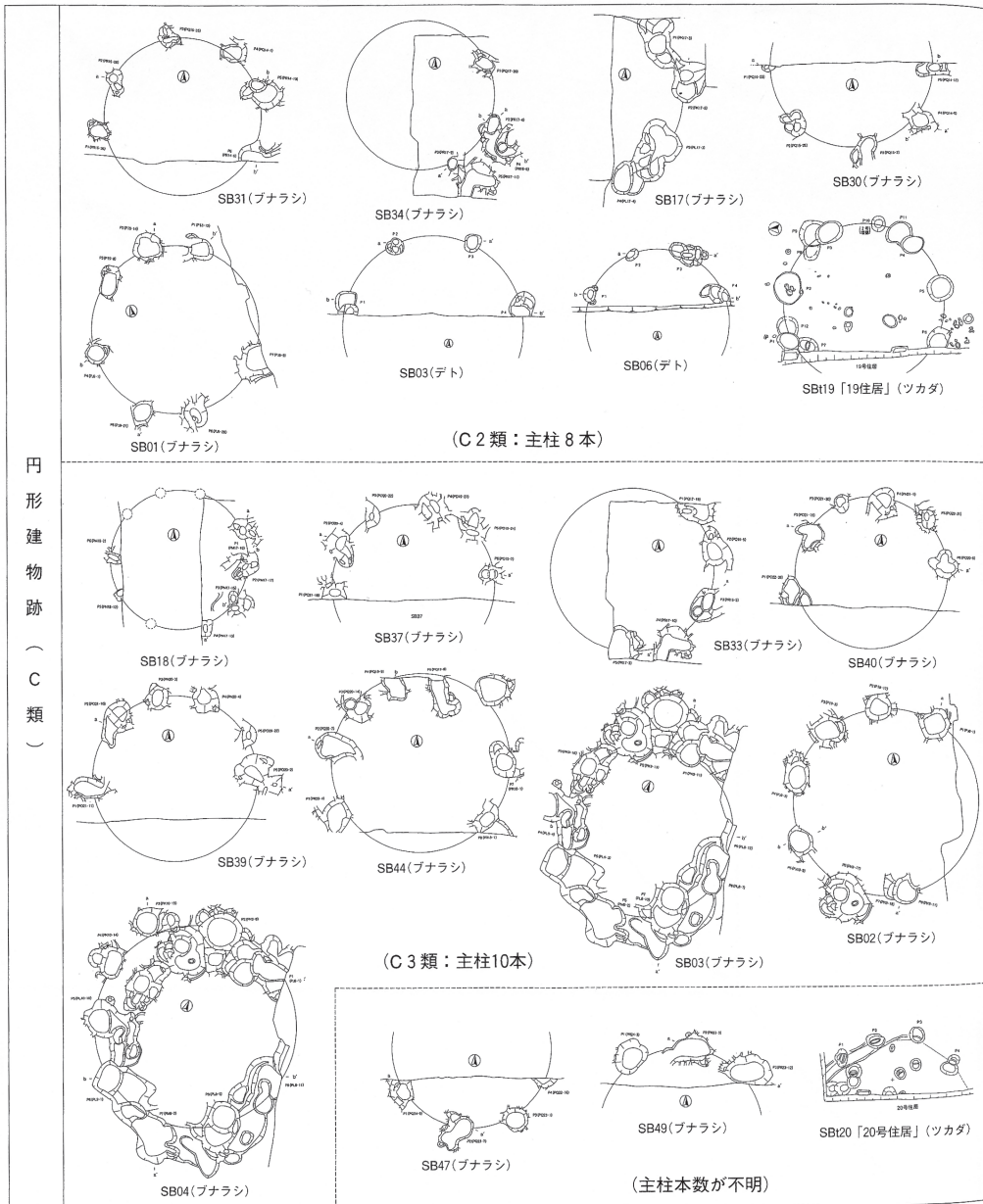


図3 御経塚遺跡の円形建物 (布尾 2003)

体的に事例の検討をおこなった9遺跡は、金沢市新保本町チカモリ遺跡、能都町真脇遺跡、金沢市米泉遺跡、鹿島郡田鶴浜町大津くろだのもり遺跡、小松市六橋遺跡、松任市旭遺跡群一塚地区、金沢市藤江C遺跡、富山県小杉町北野遺跡、野々市市御経塚遺跡である。検討結果をもとに、後期末から晩期の建物の変遷案を提示している (図4)。

	A1類	A2類	A3類	B類	C2類	C3類	D類	E類
後期	<p>八日市新俣式期</p> <p>藤江 C[S02] 藤江 C[S03]</p>						<p>御経塚</p>	<p>旭 [S01] 藤江 C[S01] 米泉 [9住] 米泉 [26住] 近岡 4次 [SB01]</p>
晩期	<p>御経塚 SB29 北野 [第1号柱跡]</p>	<p>御経塚 SB24 御経塚 SB35</p>	<p>御経塚 SB05</p>	<p>御経塚 SB22 御経塚 SB12 御経塚 SB08</p>	<p>御経塚 SB01 北野 [第2号柱跡]</p>	<p>御経塚 SB37</p>	<p>米泉 [9住] 米泉 [26住]</p>	<p>近岡 4次 [SB01]</p>
	<p>御経塚 下ト地区 SB01</p>	<p>御経塚 SB23 御経塚 下ト地区 SB02</p>	<p>御経塚 SB16</p>	<p>御経塚 SB10 御経塚 SB20</p>	<p>御経塚 SB11 御経塚 SB42 御経塚 SB01</p>	<p>御経塚 SB02</p>	<p>御経塚 下ト地区 SB03</p>	<p>御経塚 下ト地区 SB02</p>

図4 縄文後期末～晩期の建物の類型と変遷 (布尾 2003)



- | | |
|-------------------|--------------------------|
| ■ 第1次調査 (A・B・C地点) | ▨ 第1期土地区画整理事業の調査 |
| ▩ 国道8号線関連の調査 | □ 第2期土地区画整理事業の調査 |
| ▧ 国指定への調査 | ▨ 出土品展示収蔵施設建設の調査 (今回報告分) |

図5 御経塚遺跡の発掘調査区位置図 (吉田 2009)

掘立柱建物跡の出現時期に関しては、布尾氏が調査を担当した藤江C遺跡で、後期末から晩期初頭の竪穴建物跡1棟、掘立柱建物跡6棟を検出しており、図1のように方形建物が出現するのは後期末の八日市新保式期と判断している³⁾。いわゆる環状木柱列とされる円形建物跡や亀甲形建物跡は中屋式期に出現すると考えており、方形建物跡とは出現時期に年代差があることがわかる。

3. 御経塚遺跡における建物の変遷

(1) 地区ごとの建物の種類と数

吉田淳氏の研究成果から地区ごとの建物の種類・数、時期ごとの建物の変遷に関して本稿で必要な部分をぬきだして引用していく(吉田 2009)。

御経塚遺跡の調査区は国道8号線の東西と史跡指定地の南北を基準にしてブラナシ地区・デト地区・ツカダ地区の3地区に分けられている(図5)。ブラナシ地区は国道8号線の西側で史跡指定地の北側、デト地区も国道8号線の西側で史跡指定地およびその南側、ツカダ地区は国道8号線の東側である。

建物数とそれにとまなうと考えられる炉跡数をみていく。竪穴建物は6棟で、ブラナシ地区5棟、デト地区1棟である。単独で検出された石囲炉は24基で、これらの建物が竪穴になるのか、平地式になるのかは不明である、とされている。掘立柱建物は現時点では65棟確認されており、方形建物14棟、亀甲形建物31棟、円形建物・環状木柱列20棟である。地区ごとでは、ブラシナ地区55棟(方形建物10棟、亀甲形建物29棟、円形建物・環状木柱列16棟)、デト地区6棟(方形建物3棟、亀甲形建物1棟、円形建物・環状木柱列2棟)、ツカダ地区4棟(方形建物1棟、亀甲形建物1棟、円形建物・環状木柱列2棟)という内訳になる。なお、掘立柱建物については第5～7次調査区の再検討によっては増加する公算が強く、現時点での概数である、とされている。

(2) 時期ごとの建物の変遷

- 1) 酒見式期 竪穴建物や石囲炉は検出されていない。
- 2) 井口1式期・井口II式期前半 石囲炉5基のみである。
- 3) 井口2式期・井口II式期後半 竪穴建物3棟、石囲炉9基である。
- 4) 八日市新保式期 石囲炉5基のみである。
- 5) 八日市新保式期～御経塚式期

竪穴建物3棟で、そのうちの1棟は八日市新保2式期、別の1棟は御経塚式期と推定されている。

6) 中屋式期

掘立柱建物は23棟(ブラシナ地区19棟、デト地区1棟、ツカダ地区3棟)で、形態別では方形建物3棟(ブラシナ地区3棟)、亀甲形建物11棟(ブラシナ地区10棟、ツカダ地区1棟)、円形建

物・環状木柱列9棟（ブラシナ地区6棟、デト地区1棟、ツカダ地区2棟）である（図6）。

吉田淳氏は「中屋2式期からブラナシ地区で掘立柱建物が確認できる。10本柱円形建物SB18と1×2間の方形建物SB35が隣接し、亀甲形建物が河道流路と平行するように帯状に分布する」（吉田2009：63）と指摘している。そして中屋3式期に3地区すべてで掘立柱建物が出現し、デト地区・ツカダ地区でも円形建物・環状木柱列がみられるようになり、5棟いずれもが8本柱であることを指摘している。

7) 下野式期

掘立柱建物は28棟（ブラシナ地区26棟、デト地区2棟）で、形態別では方形建物5棟（ブラシナ地区4棟、デト地区1棟）、亀甲形建物17棟（ブラシナ地区16棟、デト地区1棟）、円形建物・環状木柱列6棟（ブラシナ地区6棟）である（図7）。つぎにその変遷をみていくと、下野式前半8棟（方形建物1棟、亀甲形建物5棟、円形建物・環状木柱列2棟）、下野式前半～後半17棟（方形建物3棟、亀甲形建物10棟、円形建物・環状木柱列4棟）、下野式後半～長竹式?3棟（方形建物1棟、亀甲形建物2棟）となる。

8) 長竹式期

掘立柱建物は13棟（ブラシナ地区9棟、デト地区3棟、ツカダ地区1棟）で、形態別では方形建物6棟（ブラシナ地区3棟、デト地区2棟、ツカダ地区1棟）、亀甲形建物2棟（ブラシナ地区2棟）、円形建物・環状木柱列5棟（ブラシナ地区4棟、デト地区1棟）である（図8）。

(3) まとめ

以上のように、吉田淳氏は御経塚遺跡における建物関係遺構の様相を概観し、「後期段階では、石囲炉と竪穴住居で構成されている。石囲炉は住居の核になるものであるが、この住居形態が竪穴かまたは平地式となるかは不明である。後期末から晩期前葉段階では壁が低く石囲炉のみられない竪穴住居を帰属させたが、集落様相は不明としか言えない状況である。晩期中葉以降からはブラシナ地区で掘立柱建物の変遷や分布状況がある程度示すことができた」（吉田 2009：66）と述べている。

石囲炉に関しては吉田氏とは若干見解がことなっているので、私見をのべることにする。北陸の縄文中期～後期前半における炉の変遷（山本 1987）や前述の掘立柱建物の地床炉のあり方から考えて、単独で検出された石囲炉24基は当然屋外炉でなく、平地式掘立柱建物にともなうとも考えにくく、もともと半地下式の竪穴建物にともなっていたものが、壁が削平されて床面の石囲炉だけがのこって検出されたものと考えている。それで竪穴建物6棟と石囲炉24基が単独で検出されていることから、竪穴建物は最低でも30基は存在していたと考えることができる。

また、後期の土器が埋設される石囲炉は、土器が灰の一時的な貯蔵部、石囲い部分が燃焼部になると推測されるので、複式炉の種類と考えることができる。北陸では中期後葉に石組炉を二つ連結させた複式炉が分布しており（山本 1987）、それが形態をかえて後期後半の酒見式にふたたび出現し、後期末の八日市新保式期まで残存したと推測している。

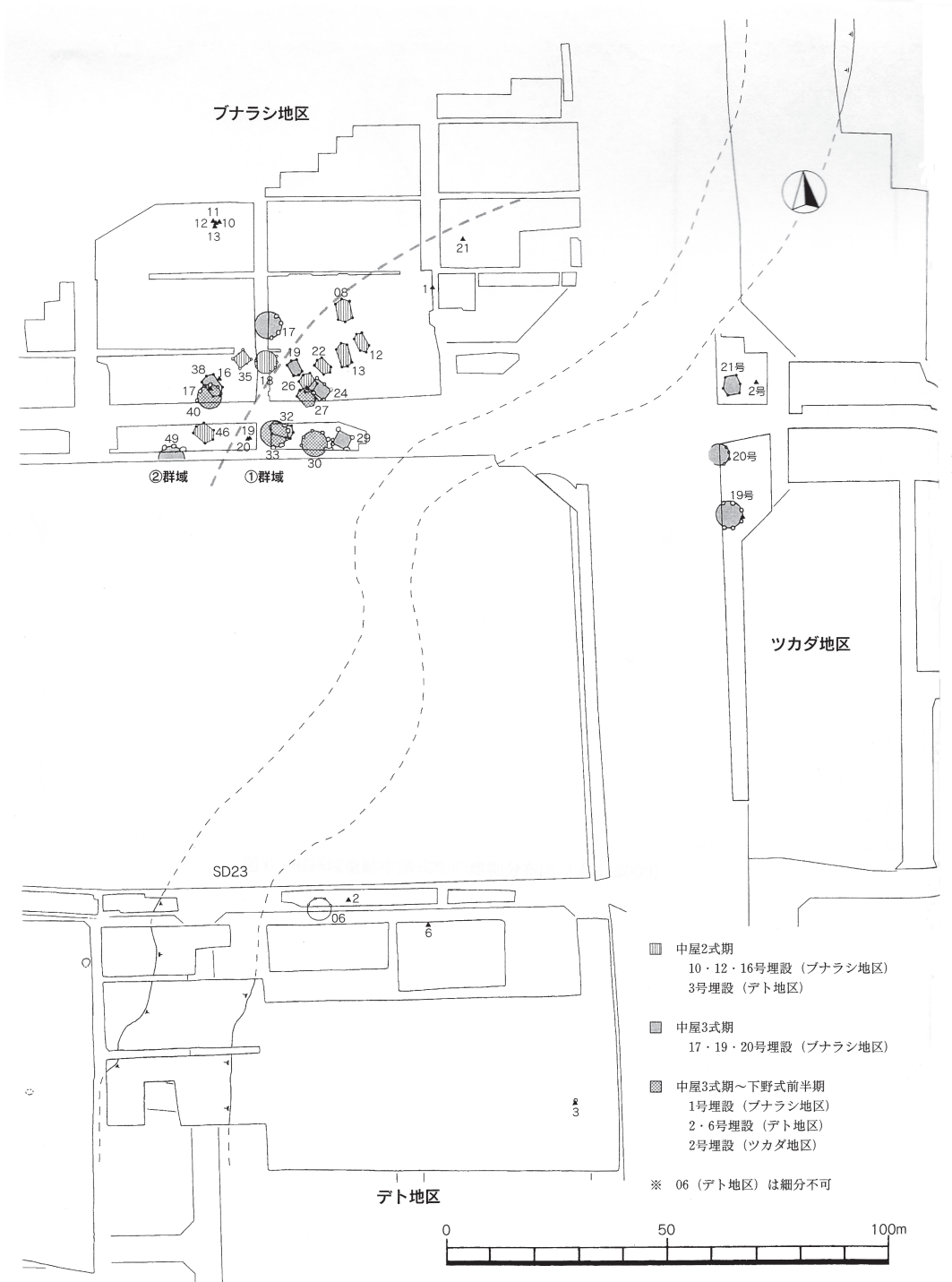


図6 御経塚遺跡中屋式期の建物分布図（吉田 2009）

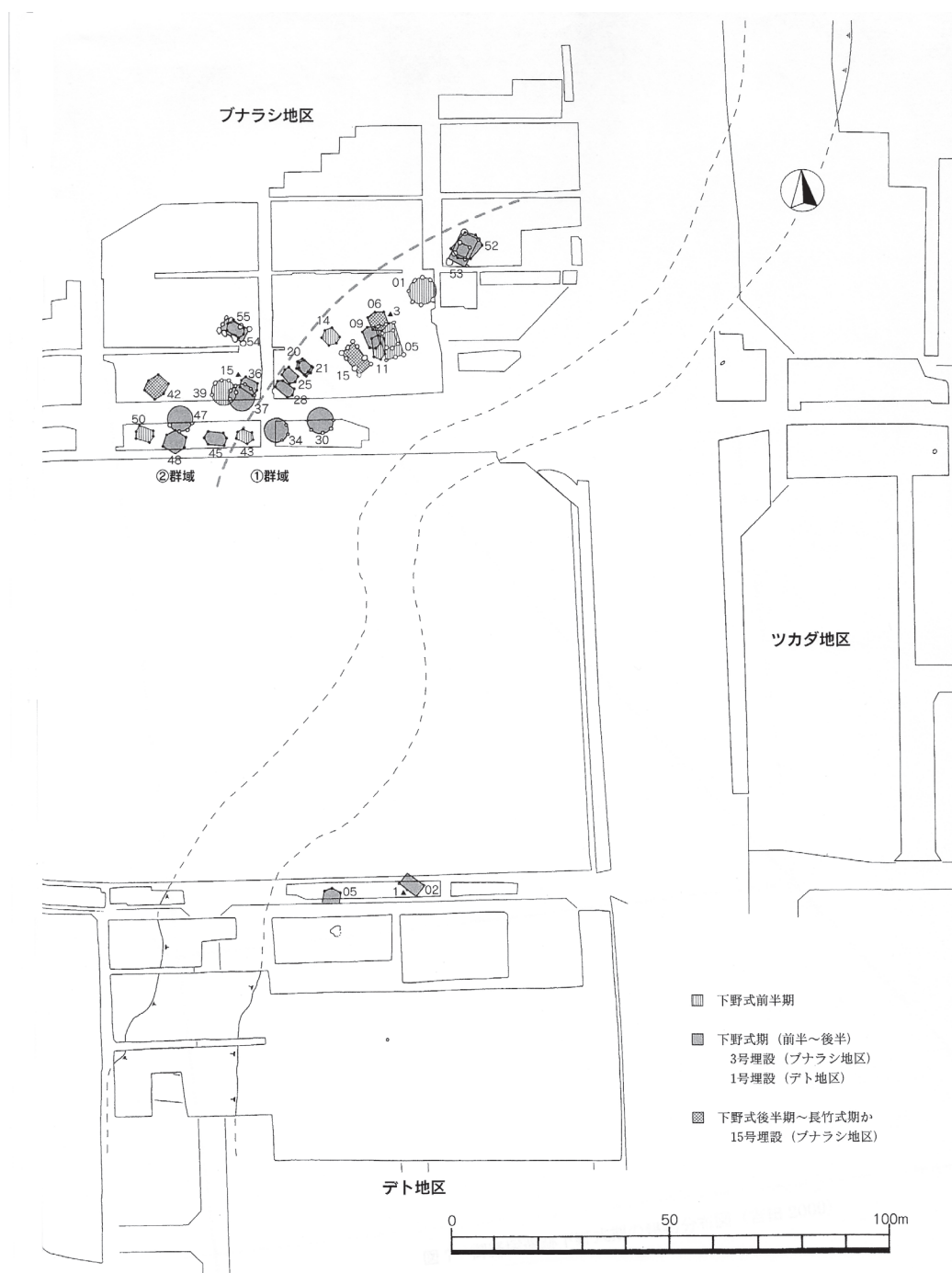


図7 御経塚遺跡下野式期の建物分布図 (吉田 2009)

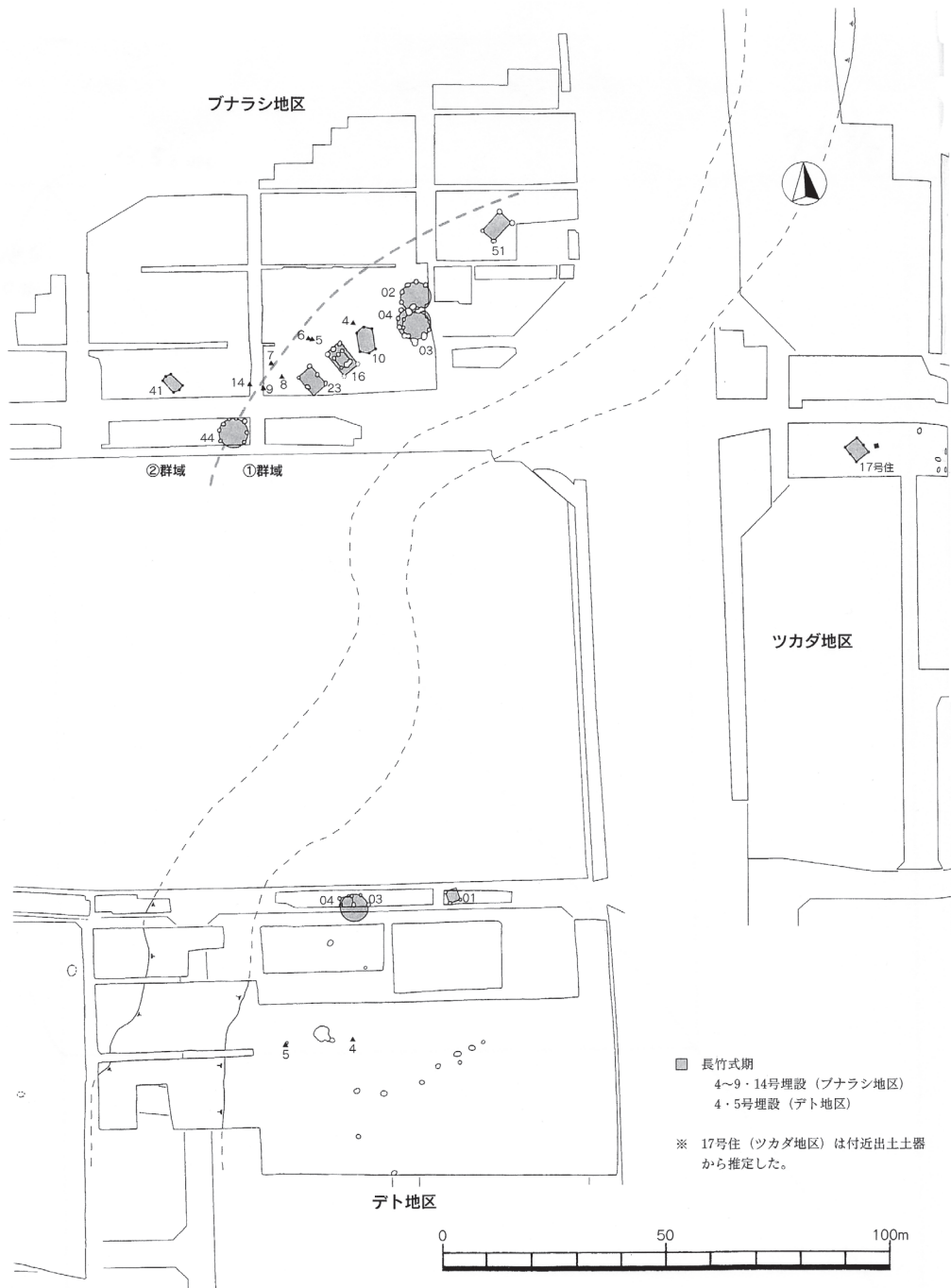


図8 御経塚遺跡長竹式期の建物分布図 (吉田 2009)

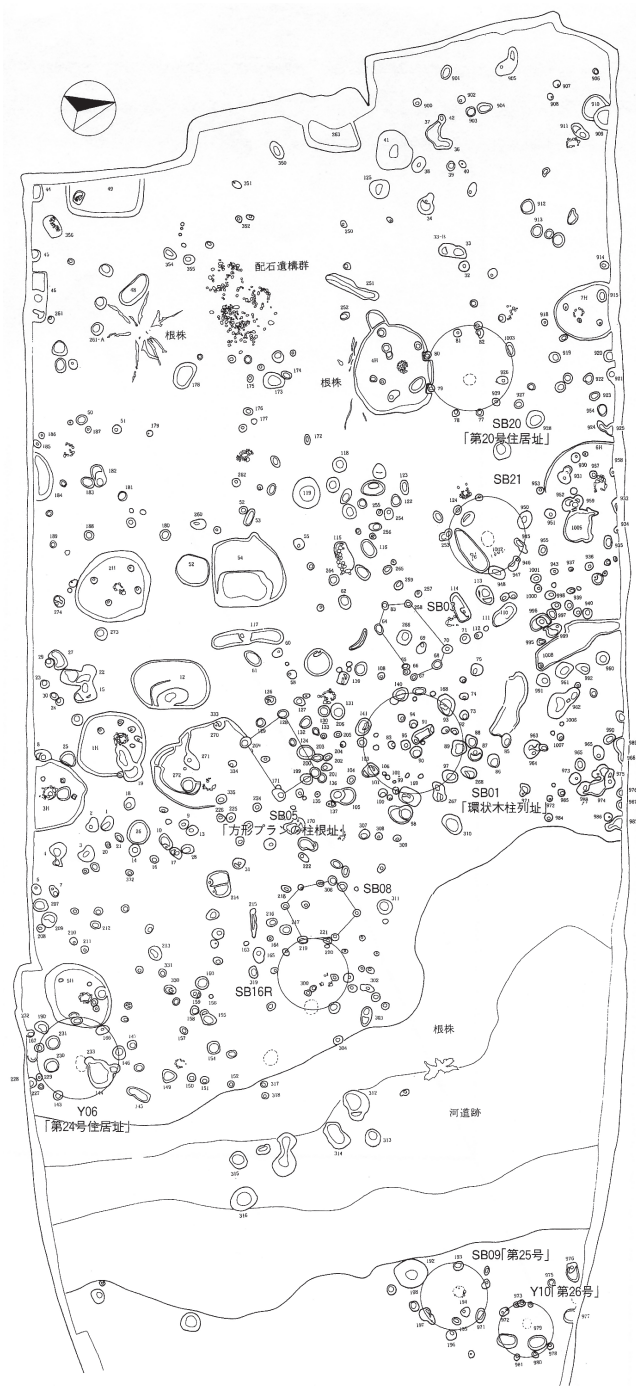


図9 米泉遺跡の建物分布図(布尾 2003)

4. 米泉遺跡における建物の変遷

(1) 時期ごとの建物の変遷

米泉遺跡からは後期の加曾利B1式から晩期中屋式まで出土しているものの、その主体は酒見式と中屋式新であることから建物の大半が両型式に属すると考えられる（西野ほか 1989）。報告書と吉田・布尾の両氏の考察（布尾 2003、吉田 2009）をもとに米泉遺跡の状況を再確認しておきたい（図9）。

1) 酒見式期

石囲炉のある竪穴建物7棟（第1～7号住居址）と石囲炉11基（第8・9・11～19号石囲炉址）が検出されている。第10号炉址は炉跡かどうか、うたがわしいために除外した。

2) 中屋式期

地床炉とその周辺の柱穴群で構成される建物が9基検出されている。第20・24～28号住居址および第21～23号炉址の9基である。吉田淳氏は、米泉遺跡の「円形建物『環状木柱列』1棟（8本柱）」とこれに隣接して『方形プランの柱根址』1棟が位置し、河道に沿いこの両側と対岸に地床炉を伴う『第20・24～27号住居址』、『第21～23・28号炉址』が展開する（西野ほか 1989）。このなかで、『第26・27号住居址・21号炉址』は亀甲形の掘立柱建物に復元が可能」（吉

表1 米泉遺跡・御経塚遺跡における建物の推移表

遺跡名 遺構名	米泉遺跡			御経塚遺跡					合計
	竪穴建物		掘立柱建物	竪穴建物		掘立柱建物			
土器型式	竪穴	石囲炉	柱穴群・地床炉	竪穴	石囲炉	方形	亀甲形	円形・環状木柱列	
酒見式	7	11	0	0	0	0	0	0	18
井口1式	0	0	0	0	5	0	0	0	5
井口2式	0	0	0	3	9	0	0	0	12
八日市新保式	0	0	0	0	5	0	0	0	5
八日市新保式 ～御経塚式	0	0	0	3	0	0	0	0	3
中屋1式	0	0	0	0	0	0	0	0	0
中屋2式	0	0	0	0	0	1	6	1	8
中屋3式	0	0	0	0	0	2	4	5	11
中屋2～3式	0	0	12	0	0	0	0	0	12
中屋3式～ 下野式か	0	0	0	0	0	0	1	3	4
下野式前半	0	0	0	0	0	1	5	2	8
下野式 (前半～後半)	0	0	0	0	0	3	10	4	17
下野式後半～ 長竹式か	0	0	0	0	0	1	2	0	3

田 2009: 63) であるとし、これが御経塚遺跡ブラシナ地区の中屋2式期に近似することを指摘している。

(2) まとめ

酒見式期では石囲炉のある堅穴建物7棟と石囲炉11基が検出されていることから、18棟の堅穴建物が存在していたと推定できる。また、御経塚遺跡では堅穴建物や石囲炉は検出されていないが、御経塚遺跡でも同様の状況であったことが想定される。酒見式期の遺構は井口Ⅱ式期以降の整地や掘削などで破壊されてしまっただけで残存しなかっただけである、と吉田氏も筆者も推測している。

5. 建物の変遷に関する考察

表1は、米泉遺跡と御経塚遺跡における堅穴建物数と掘立柱建物数の土器型式ごとの推移をあらわしたものである。後期の酒見式期から晩期の御経塚式期までは堅穴建物がみられるが、両遺跡では掘立柱建物はまだみられない。一方、晩期中屋2式期から長竹式期では堅穴建物はみられず、掘立柱建物ばかりになる。こうした事実から、住居数の推移から縄文文化の盛衰や遺跡の消長に言及する場合、とくに北陸を対象とした場合には、中屋式期以降に普及する掘立柱建物の存在の有無を調査現場や遺構平面図で確認してからでないか実態を見誤ってしまうことになる。

本稿の冒頭で示したように、御経塚式期で堅穴建物が消滅し、中屋式期、とくに中屋2式期(大洞C1式前半)で掘立柱建物ばかりになる背景を考究することが第一の目的であった。

この前段階として中屋式の較正年代を確認しておく、前述のように筆者は中屋式をc.1100～c.900 cal BCとしている。中屋1式は大洞BC2式に並行すると吉田淳氏は考えており、大洞BC式の較正年代はc.1100～c.1000 cal BCあることが小林謙一氏によってしめされている(小林2008)。それを単純に二分して前後半に分けると中屋1式(大洞BC2式)はc.1050～c.1000 cal BCとなり、筆者の年代観とは少しずれることになる。つぎに中屋2式(大洞C1式前半)・中屋3式(大洞C1式後半)の並行関係にある大洞C1式の較正年代はc.1000～c.900 cal BC(小林2008)で、それも単純に二分して前半と後半に分けると中屋2式(大洞C1式前半)はc.1000～c.950 cal BC、中屋3式(大洞C1式後半)はc.950～c.900 cal BCとなる。また、小林謙一氏や筆者らは中屋サワ遺跡の土器付着炭化物のAMS炭素14年代測定をおこなっており、そのなかには大洞C1式に並行する中屋式土器22点の測定もふくまれている。これらの結果や前後の型式の測定結果からc.1000～c.940 cal BCに相当する可能性が高いことを指摘している(小林ほか2009)。ただし、それに後続する下野式(大洞C2式並行)の較正年代はc.1125～c.940 cal BCと古くで中屋式と重複してしまっており、中屋式(大洞C1式並行)の較正年代c.1000～c.940 cal BCも不安視されるが、大洞C1式の較正年代c.1000～c.900 cal BCの範囲の中にはいっているので、一応信用はできると考えている。これらのことを考慮すると、中屋1式(大洞BC2式)

はc.1050～c.1000 cal BC、中屋2式（大洞C1式前半）はc.1000～c.950 cal BC、中屋3式（大洞C1式後半）はc.950～c.900 cal BCと細分することができる。

上記の課題に対する解釈としては、一つには気候変動、とくに寒冷化への対応策として掘立柱建物を導入したこと、もう一つは東北地方の影響をうけて導入したことを想定することができる。

気候変動からみていくと、今村峯雄氏は前1200年頃と前900年頃が寒冷化した時期であったことを指摘している（今村・藤尾 2009）。御経塚式はc.1300～c.1100 cal BC、中屋式はc.1100～c.900 cal BC、下野式はc.900～c.800 cal BCとなるので、前1200年頃は御経塚式の間、前900年頃は中屋式と下野式の境界になり、中屋2式期（c.1000～c.950 cal BC）は気候の寒冷化とは無関係で、この点是否定されてくる。また、仮に掘立柱建物の出現が中屋1式期（c.1050～c.1000 cal BC）にさかのぼったとしても寒冷化は関係ないといえる。

東北地方の影響に関しては、後期末の八日市新保式にみられる連結三叉文が晩期初頭の御経塚式の玉抱三叉文へとスムーズに変化していく過程がたどれ（高堀ほか 1983）、御経塚式の成立にあたって東北地方と交流はあったものの、影響はそれほど強くはなかったと考えている。時間がたつにつれて東北地方の影響が強くなり、中屋式の段階になって東北地方の掘立柱建物を受容したと考えている⁴⁾。

第二の目的としては、円形建物・環状木柱列の出現する較正年代を提示することとその背景を考究することをあげている。手取川扇状地においては円形建物・環状木柱列が出現するのは中屋2式（大洞C1式前半）期であることが吉田淳氏によって明らかにされており、前述のように中屋2式（大洞C1式前半）の較正年代はc.1000～c.950 cal BCであることから、円形建物・環状木柱列が出現する較正年代はc.1000～c.950 cal BCと推定することができる。

こうした晩期の円形建物・環状木柱列は北陸独自のものであり、方形・亀甲形の掘立柱建物の本格的な導入を契機に独自に考案し、建造したものと考えている。東北地方の影響を強くうけるなかで、自分たちの独自性を発揮するために円形建物・環状木柱列という装置をうみだして建造したものと考えている。

第三の目的は、晩期後半に円形建物・環状木柱列が巨大化していく背景を考究することであった。晩期後半の下野式期（c.900～c.800 cal BC）から長竹式期（c.800～c.600 cal BC）の古い段階になると、真脇遺跡A・B環や新保本町チカモリ遺跡A・C・D環のように直径が6～8m、10本柱、木柱根の弦の長さが40～90cmにおよぶ大型の環状木柱列・円形建物が建造されるようになる（山本 2009）。この時期は、c.930～c.900 cal BCごろに北部九州に伝播した水田稲作農耕がちょうど西日本に拡大している時期にあたっていることから、大型化の背景には北陸の地域社会の指導者層は水田農耕に基盤をおいた生活システムを拒絶し、新たな生活システムや価値体系に対抗することがあったと推察している。円形建物・環状木柱列を集落の構成員全員で、あるいは地域社会の構成員が参加して建造することにより、集落や地域社会の一体感を高めたと推測している。また、円形建物・環状木柱列でとりおこなわれた儀礼や祭祀は集落や地域社会の絆

をつよめ、秩序や規範をたもつ役割をはたしたものと考えている。

おわりに

今後の課題として3点指摘しておきたい。第一に、円形建物・環状木柱列の地上構造、すなわち家屋、屋根をもつ建造物、柱だけが建立物のいずれになるのかを明らかにすることである。第二に、建物の状況が不明な中屋1式期の実態を解明することである。竪穴建物が残存するのか、あるいは掘立柱建物にかわっているのか、それとも両者が並存するのか、その実態を明らかにすることは急務である。第三に、入れ子状になる方形建物の地上構造を明らかにすることである。

註

- 1) 吉田淳氏は「竪穴住居」と「掘立柱建物」と表現しているが、竪穴建物の用途に関する検証がおこなわれているわけではなく、すべて住居になるとはかぎらない。大多数は住居になると推測されるが、本稿では「掘立柱建物」にあわせて「竪穴建物」と表記している。
- 2) 布尾和史氏は、一般に環状木柱列とよばれている円形建物も方形建物や亀甲形建物と同様に掘立柱建物と考えている。そして円形建物は集落の中での重複占地を根拠に核家屋として論じ、「単一の集落、あるいは集落間社会を維持する上での指導者が居住する建物と理解したい」(布尾 2003: 422)としている。円形建物を掘立柱建物とするときには、柱だけがたっていた可能性や屋根だけ葺かれていた可能性を否定し、掘立柱建物にしかならないことを根拠を明示して論証する必要があるが、地上構造の検証はおこなわれていない。また、重複占地という同じ場所での建て替えがおこなわれていても、柱だけが建っていたものが建て替えられた可能性や屋根だけ葺かれていたものが建て替えられた可能性もあり、そうした可能性を否定しなければならないが、それもおこなわれていない。
- 3) 布尾氏は、柱穴が円周上で不定に配される簡易な円形建物跡をD類として設定している。御経塚遺跡の「第7号炉址」と「第8号炉址」(高堀ほか 1983)が該当すると考え、その所属時期は井口Ⅱ式であるため検討対象から除外した旨、本文にしるしている。布尾氏が作製した図4では八日市新保式期のD類の欄に「第7号炉址」が掲載されているが、これは貼りまちがいであろう。
- 4) 金沢市中屋サワ遺跡からは八日市新保式から長竹式まで縄文土器を出土しており、もっとも出土量の多いのが中屋式で、ついで御経塚式となっている(谷口・前田ほか 2009、谷口・谷口ほか 2010)。この中屋サワ遺跡から出土した縄文土器を観察していて気がつくのは、手取川扇状地のほかの遺跡とくらべて大洞式の移入土器が多い点である。数値化して言及しているわけではなく、あくまで感覚だけなので、今後具体的に検討をすすめなければならぬと考えている。また、中屋サワ遺跡が東北地方の地域社会から直接入手したものか、この地域の中核となっていた御経塚遺跡をとおして間接的に入手したものか、この点も今後解決をはかっていかなければならない課題である。

中屋式の前半期にあたる中屋Ⅰ式とその後半期になる中屋Ⅱ式においては、土器表面の色調の種類数にちがいがみられる。酒見式から中屋Ⅰ式までは12種類あるいは15種類であるのに対して、中屋Ⅱ式では9種類、下野式では7種類と土器型式があたらしくなるにつれて種類数が減少する傾向がみとめられる(山本・水野 2005)。それと掘立柱建物の出現の関係については言及できるわけではなく、ここでは中屋式の期間中にそのような変化があるということを参考程度に指摘するにとどまる。

引用文献

- 荒川隆史、2009、「掘立柱建物と建材」『生活空間 —集落と遺跡群—』縄文時代の考古学8、74～84頁、同成社：東京。
- 今村峯雄・藤尾慎一郎、2009、「炭素14年の記録から見た自然環境変動 —弥生文化成立期—」『弥生文化誕生』弥生時代の考古学2、47～58頁、同成社：東京。
- 小林謙一、2008、「縄文時代の暦年代」『歴史のものさし』縄文時代の考古学2、257～269頁、同成社：東京。
- 小林謙一・福海貴子・坂本 稔・工藤雄一郎・山本直人、2009、「北陸地方石川県における縄文晩期から弥生移行期の炭素14年代測定研究」『国立歴史民俗博物館研究報告』第150集、1～32頁、国立歴史民俗博物館：佐倉。
- 高堀勝喜ほか、1983、『野々市町御経塚遺跡』、野々市町教育委員会：石川県野々市町。
- 谷口宗治・前田雪恵・向井裕知ほか、2009、『石川県金沢市 中屋サワ遺跡Ⅳ 下福増遺跡Ⅱ 横江荘遺跡Ⅱ』金沢市文化財紀要255、金沢市埋蔵文化財センター：金沢。
- 谷口宗治・谷口明伸・向井裕知ほか、2010、『石川県金沢市 中屋サワ遺跡Ⅴ』金沢市文化財紀要262、金沢市埋蔵文化財センター：金沢。
- 西野秀和ほか、1989、『金沢市米泉遺跡』、石川県立埋蔵文化財センター：金沢。
- 布尾和史、2003、「御経塚遺跡における建物跡の検討—北陸縄文晩期集落理解への基礎作業」『御経塚遺跡Ⅲ』、391～425頁、野々市町教育委員会：石川県野々市町。
- 山本直人、1987、「北陸における複式炉出現前段階期の炉」『石川考古学研究会々誌』第30号、41～54頁、石川考古学研究会：金沢。
- 山本直人、2006、「御経塚遺跡と地域社会」『野々市町史』通史編、34～47頁、石川県野々市町。
- 山本直人、2009、「環状木柱列からみた縄文時代晩期の地域社会」『名古屋大学文学部研究論集』164（史学55）、25～38頁、名古屋。
- 山本直人・水野梨恵子、2005、「御経塚遺跡における縄文土器の彩色と色調」『考古論集（川越哲志先生退官記念論文集）』、101～116頁、川越哲志先生退官記念事業会：東広島。
- 吉田 淳ほか、2003、『御経塚遺跡Ⅲ』、野々市町教育委員会：石川県野々市町。
- 吉田 淳、2009、『御経塚遺跡Ⅳ』、野々市町教育委員会：石川県野々市町。

AbstractThe Community Considered by the Buildings of the Late and Final Jomon,
Tedorigawa Alluvial Fan

Naoto YAMAMOTO

The pit-type buildings are found from the *Sakami* type of c.1700–c.1500 cal BC to the *Okyoduka* type of c.1300–c.1100 cal BC in the Tedorigawa alluvial fan. The square posthole-type buildings appear during the *Yokaichi-simbo* type of c.1350–c.1300 cal BC, and the pentagonal and hexagonal posthole-type buildings appear during the *Nakaya 2* type of c.1000–c.950 cal BC although the buildings are not found during the *Nakaya 1* type of c.1100–c.1000 cal BC. These come from the posthole-type buildings of the Tohoku district.

The circular posthole-type buildings also emerge during the *Nakaya 2* type. These are the same as the wood circles and characteristic in the Hokuriku district. The upper structure was almost completely decayed and lost and we excavated the remains of logs in the underground. So the upper structure is not known if it was a part of a building or only columns. Some archaeologists suppose it to be a building for residential, ceremonial or monumental purposes. It remains inconclusive. The wood circles become large and consist of 8 or 10 poles arranged in a circular configuration of 6 to 8 meters in diameter, having a gate-like structure during the *Shimono* type of c.900–c.800 cal BC and the *Nagatake* type of c.800–c.600 cal BC. The people of Jomon Period were hunter-gatherer-fishers. According to the recent study, it was introduced the cultivation of rice in paddy field from the Korean peninsula in c.930 cal BC. The date of constructing the large-size wood circles corresponds with the period when the paddy rice growing was introduced to the northern Kyusyu and distributed to the western Japan. So, it is not difficult to imagine the Jomon people of the Tedorigawa alluvial fan needed to strengthen integration of their local communities against the new system of subsistence and ideology. The construction of the large-size wood circles could function for this purpose.